

むつれじま
下関市六連島遺跡出土の朝鮮系無文土器

杉原和恵

はじめに

ここに紹介する資料は、響灘に浮かぶ小島、六連島（山口県下関市）において、昭和33年3月、当時山口大学教育学部助教授であった小野忠熙氏が下関市教育委員会の委嘱を受けて発掘調査を行なった際に出土したものである。現在は、他の出土遺物とともに当山口大学埋蔵文化財資料館に保管されている。

いわゆる朝鮮系無文土器の日本国内における出土が留意され報じられるようになったのはここ十数年のことであるが、以来、既出の資料についても再確認が行なわれ、九州北部を中心次第に出土例・確認例を増しつつあり、近年では近畿からの報告も聞かれる。¹⁾

本資料は、調査報告で弥生土器に包括して記載されたため、後の文献にもそのまま引用・転載され、今日までその存在が知られなかった。当館では、人文学部考古学研究室学生諸氏の協力を得つつ、1985年度より館蔵品の把握と公表を目的として収蔵遺物を整理しているが、その作業に伴い、本資料が朝鮮系無文土器であることが確認されるに至った。弥生時代日韓の併行関係を立証する上でこの種の土器の存在意義は特に高いが、その類例はまだ充分と言える段階ではなく、山口県内では下関市綾羅木郷、同市秋根、宇部市沖ノ山、阿知須町引野、山口市西、防府市大崎の6遺跡からの出土が知られるにすぎない。六連島遺跡は小島の砂嘴に立地するため、波浪による攪乱を受け遺構や遺物の共伴関係は判然としないが、同形態の口縁をもつものの出土例が少ないこともあり、既出資料の再検討を啓発する意味も兼ねて特に紹介することとした。²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾⁹⁾

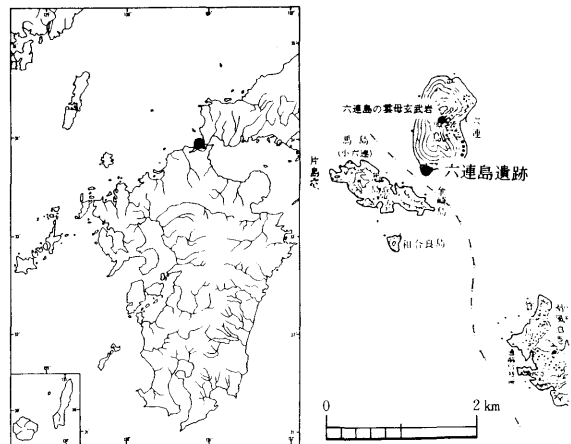


Fig. 108 六連島遺跡位置図

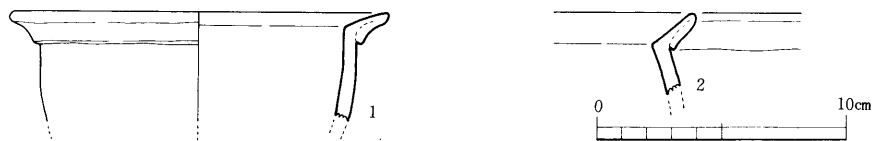


Fig. 109 朝鮮系無文土器実測図

朝鮮系無文土器 (Fig. 109)

2点とも甕であるが、胴部下半、底部を欠き、全体の形状は不明である。

1は復原口径15.2cmを測り、内外面とも淡橙色を呈する。胎土には1～2mmの石英・長石を多く含み、焼成は良好。器面は残存部を見るかぎりすべてナデ調整。形態の特徴は、頸部が、やや甘い明確に稜をもって「く」字状に屈曲すること、そして口縁を外面に平たく折り返して粗雑にナデつけ、口縁の断面が細長い三角形になることである。この折り返しは、表面を強く指で押さえて器表に密着させた後に横ナデして整えており、そのため中央が凹みややや下ぶくれの感がある。

2も基本的には1と同様の手法を用いているが、1よりも内傾し胴が張るようである。口縁の折り返しは1ほど中央の凹みがなく扁平であるが、部分的にはかなり中央の凹む箇所もあり、胎土、焼成、色調とも1に酷似するところから、少し歪みのある同一個体である可能性も捨てきれない。

韓国本土では、口縁に粘土紐を巻きつけたり口縁を外面に折り曲げたりする特徴をもつ無文土器を、一般に「粘土帯土器」と呼称している。本資料は、そのなかでも後藤直氏が口縁断面が円形を呈する「粘土紐甕」と一線を画して「粘土帯甕」と呼び、より後出する形態であるとしているもので、同氏編年の後期第三期に比定される。¹⁰⁾ 口縁部断面が三角形で、頸部の屈曲するものは、秋根¹¹⁾、沖ノ島社務所前¹²⁾、対馬の芦ヶ浦第一洞穴とオテカタの各遺跡で出土しているが、秋根のものは折り返した粘土帯表面に押さえによる凹みがなく、沖ノ島・芦ヶ浦のものは押さえの後の横ナデ調整に欠け指頭痕を顕著に残す。粘土紐を強くナデたり押さえたりという手法だけならば、他に壱岐の原ノ辻¹⁵⁾、小郡市横隈鍋倉遺跡¹⁶⁾などにも類例があるが、口縁内面の屈曲度や口縁の断面形は、「粘土紐甕」の域を出ない。本資料のような手法・形態をもつものは、むしろ直接韓国南東部の洛東江流域に多くの出土例を見ることが近年の韓国側の調査により確認されつつあり¹⁷⁾、現状で韓国本土の「粘土帯甕」に最も近似するのが本資料であると言える。これと対照的に、口縁断面円形の「粘

土紐甕」は朝鮮半島中部の漢江流域にその分布の中心をもつのは興味深い事実である。無文土器の日本における受容形態は、断面円形のもものが、先進地域であろう福岡平野とさらに内陸の筑紫平野北部を中心に、ややまとまって出土するのに対し、断面三角形のものは朝鮮寄りの島嶼、山口県海岸部で散見される程度である。日韓両国内において、無文土器の地域差と時期差の関係を追求してゆく必要がある。

出土弥生土器の検討 (Fig. 110~112)

¹⁸⁾ 報告によれば、トレンチ内で検出された数枚の包含層は、相互に若干の混入はみられるもののほぼ一定の文化期ごとの堆積を示していたという。がそれは、縄文、弥生、土師須恵の各土器層という大枠での見解であり、各時代のなかでさらに土層の細分ができるほどに整然とした堆積状況ではなかった。よって本稿では、出土した弥生土器のうち図化可能なものほとんどをともに紹介し、無文土器の帰属時期推定のための検討に供する。

1~11は壺。甕に比べて壺の出土は少ないが、1~4と5~10との2時期に分けられるようである。1・2は口縁部片で、1はかなり頸部が内傾し、内面上部に平坦面を有する。2は頸部との境にやや甘い段をもつ。3、4は胴部片であるが、同一個体の可能性がある。3は頸部との境に段を有し、ヘラ描きの沈線と方向を変える有軸羽状文を施文。4は3より下部にあたる破片で、截頭山形文の上を沈線で画し、その上に何らかの文様をもつ。

5は端部に平坦面を作り、頸部はほぼ直立するようである。6は端部が丸く、器壁が厚い。7はラップ状に開く口縁の内面を貼り付けにより肥厚させ、その上に円形浮文を貼り付ける。端部はやや下垂気味に面を作り鋸歯文を配するが、その施文は未だ類例を聞かないトゲ状の突起をもつ工具の押圧による。横ナデ仕上げであるが、頸部近くは刷毛が残る。8は胴部最大径に尖頂突帯を貼り付け、その下方を指圧する。内面刷毛、外面ミガキ。

9は長頸壺の口縁部片で、口縁下にM字状突帯を2条貼り付け、全面に赤色顔料を塗布する。10も長頸壺の可能性もある。頸部屈曲部外面に突帯を貼り付け、その上に刻みを押圧するが、この施文具も類例を見ない形態である。11は穿孔を有する無頸壺の口縁部片。

12~41は甕で、12~26が前期、27~35が中期、36~41が後期に比定できる。

12~20・22・23は刻みをもつ口縁部片で、21のみが刻みをもたず他に比べ脆い。12~16・23は平坦な端部を作らず、ほぼ端部の上下に渡って刻むもの。12・13はランダムに刻みを押圧する他の個体と異なり規格的な押圧刻みを行なう。16は刻みがやや下端に寄り、口縁内面が内彎気味につまみ上げられている。23は頸部内面に稜をもち、かなり張る胴部に少

下関市六連島遺跡出土の朝鮮系無文土器

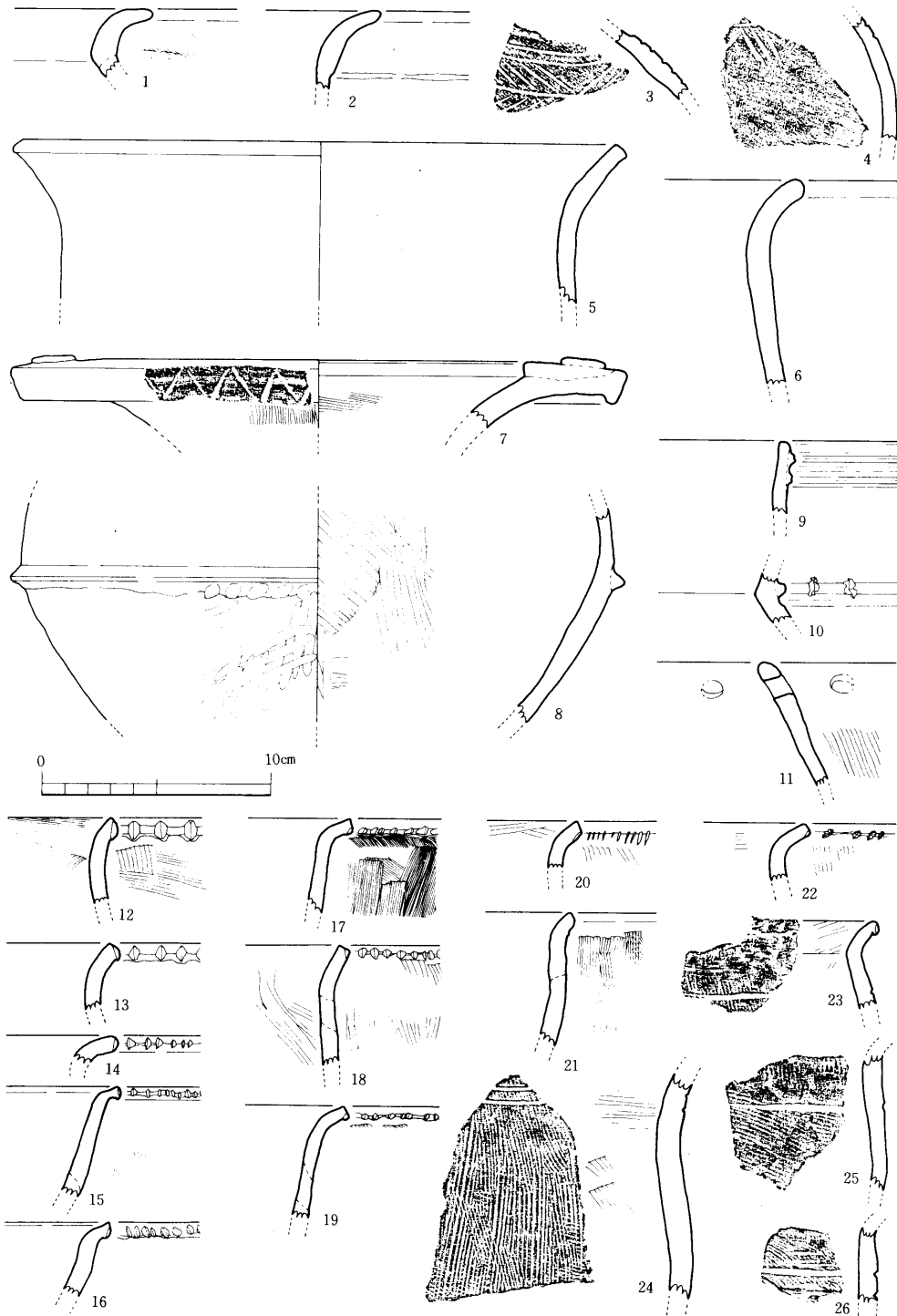


Fig. 110 弥生土器実測図 (1)

出土弥生土器の検討

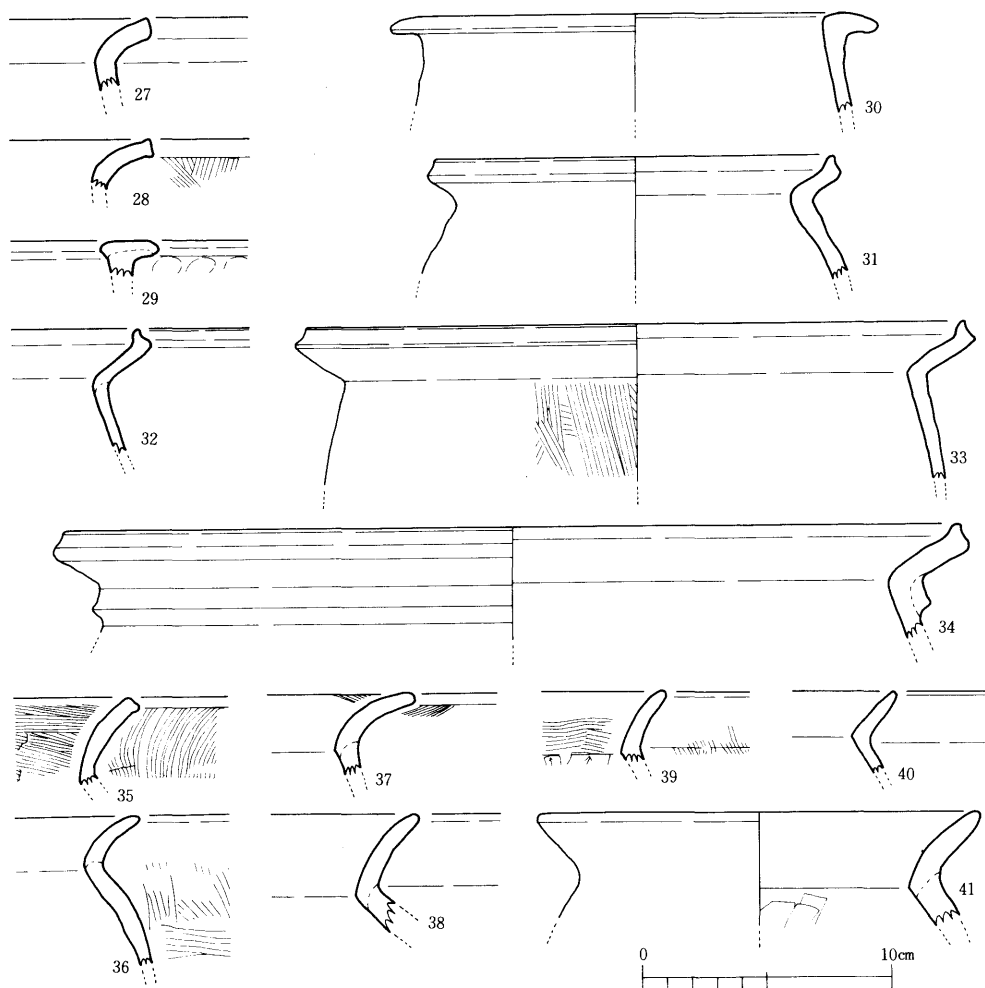


Fig. 111 弥生土器実測図(2)

なくとも1条の沈線を施す。口縁の刻みは刷毛原体による。17~20・22は端部をきちんと面取りした後、その下端を刻むもの。20は刻みが細く退化している感を受ける。22は胴が張り、刷毛原体で刻みを施す。25・26はこれらに伴うとみられる胴部片で、ともに口縁部との境で欠損し、25は1条、26は少なくとも2条の沈線を有する。24も胴部片で少なくとも2条の沈線を有するが、胎土・焼成良好で器壁が厚く、前述の二者とはかなり異なる。

27・28は口縁端部に面を作り、内面がわずかに内彎気味になるもので、27は頸部内面に明確な稜をもつ。29・30は強く短く屈曲する口縁をもち、硬質の焼成。29は頸部外面に指圧痕を残す。31~34は遠賀川以東で普遍的に出土する跳ね上げ口縁をもつもので、どの個

下関市六連島遺跡出土の朝鮮系無文土器

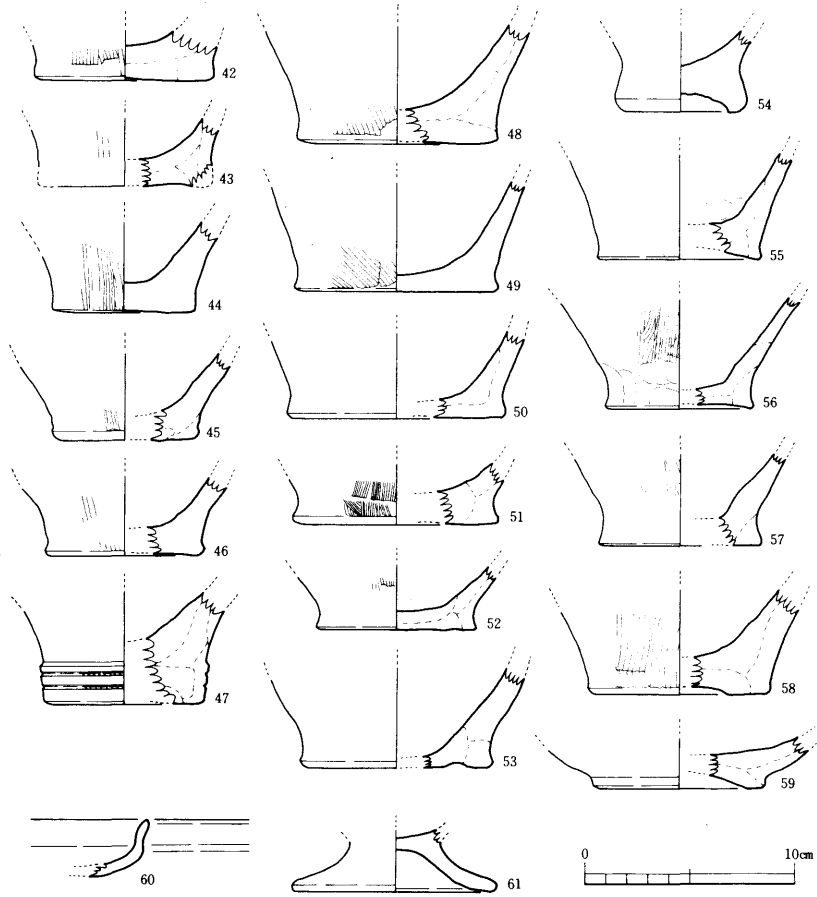


Fig. 112 弥生土器実測図(3)

体も端部外面をへら状のもので横ナデして凹ませており、跳ね上げの部分が外反するような印象を与える。33の外表面には煤が多量に付着。34は頸屈曲部外表面に1条の突帯を貼り付ける。35は時期がやや降ると思われるが、硬質で、外彎した口縁の端部に面を作る。

36~41は、明らかに時期の異なる一群である。37・39・41は内面頸部以下はケズリ。40もその可能性がある。39・40は胎土・焼成良好で、40は端部にわずかに面を持つ。

底部は、やはり甕が多数を占めるようである。

平底には、底径7~8cmの小型のもの(42~47・52)と、10cm前後の大型のもの(48~51・53)とがあるが、そのうち52・53は薄手で底面の外側近くに凹みが巡る。47は、厚く円板状に削り出した底部の外周に刷毛原体による2条の沈線をもつ壺。

54～59は上げ底のものであるが、57は平底の可能性もある。底面外側に平坦面を作らずすぐに上げ底になるもの（54～56）と、外側に平坦面を残して中央部を凹ませるもの（58・59）とがある。54は硬質だが底部外面の調整が粗い。55は縦刷毛の後外面を縦方向に強くナデている。56は外面に顕著な指圧痕を残す。59はあまり類例を見ないが高台状の底部をもち、胴下部がかなり内彎する。

60は高坏の坏部片。61は脚台付きの鉢または壺の脚部と思われる。

以上の土器の検討により、六連島遺跡の弥生時代は、ある程度の空白期間をはさみながらほぼ4時期に区分できるように思われる。

弥生Ⅰ期 前期中葉から後半にかけての時期。1～4の壺やFig. 110の甕のほとんどはこの時期に属するものであろうが、むしろ3・4の壺の文様や、甕の胴が張らず鉢形になるものが多いこと、沈線が少ないことなどから、やや古い要素をもつものの方を主体とするであろう。

弥生Ⅱ期 前期終末から中期前葉にかけての時期。23・27・29・30の甕口縁や47の壺底部、54の甕底部がこの時期にあたると思われるが、この時期にあたる特徴的な壺が47以外に認められないため、生活の一時期として成立させるにはやや根拠が弱い。九州北部の中期土器は遠賀川を境としてその東西で系譜を異にするとされるが、六連島の場合¹⁹⁾は前期末には在地（遠賀川以東）の特色が濃く、中期に入ると遠賀川以西の直接の影響が汲み取れる。

弥生Ⅲ期 中期後半を中心とする時期。壺・甕ともに径を復原できる程度の破片が残っている。7～9の壺や31～34の甕などが典型的なこの時期のものである。中期前葉とは違い遠賀川以東系の土器を主体とするが、7の壺は瀬戸内と九州との文化の折衷形態として興味深い。8はやや遡るかもしれない。

弥生Ⅳ期 後期後半を中心とする時期。量は少ない。36～41がこれにあたるが、布留系統の土師器甕も数個体存在しており、むしろ古墳時代の方に重心があるようである。

以上の4時期のなかで、特にⅠ期とⅢ期に属する遺物が多く、弥生時代の六連島はこの2時期を中心に営まれたものと思われる。Ⅱ期は、当遺跡が暖季のみの季節的移住²⁰⁾によって成り立つ漁村であるならば、付近にその母集落となるであろう綾羅木郷、伊倉、原、長行、馬場山などこの時期の遺跡が多く存在する以上、大盛行したはずの施文壺や厚い上げ底の甕底部などの欠落する点はうなづけない。Ⅱ期の存在についての疑問は、同時に、Ⅱ期が無文土器の帰属時期として成り立つのかどうかという不安となって残る。

無文土器帰属時期の推定

福岡平野や筑紫平野ではかなりの数の「粘土紐甕」が出土しており、弥生土器との共伴関係が知られるが、この系譜のものは口縁部形態がさらに細分できるようである。

口縁断面が完全な円形で卵形の胴部をもつ「直輸入」の形態は前期後半期に主に福岡平野と筑紫平野北部に現れ、中期半ばまで存続する。六連島対岸の綾羅木郷遺跡や長行遺跡²¹⁾では鉢形の「粘土紐甕」が出土している。

口縁断面が完全な円形でなく上部に平坦面を作ったり「コ」の字形にしたりするものは、

やや降る時期（中期初頭～前葉：城ノ越²²⁾須玖Ⅰ式共伴期）に出現し、土生遺跡のようにより内陸に分布するようである。この口縁部形態は城ノ越式の甕に近似しており、中期になるとともに弥生土器の影響を受けて変化した可能性が高い。

これに対し、「粘土帯甕」は出土量が少なく、そのなかでも単に口縁外面に扁平な粘土を巡らせるだけではなく頸部を確かに「く」字状に屈曲させる属性をもつものは、前述のとおり芦ヶ浦、オテカタ、沖ノ島、秋根、六連島からの出土品のみであり、これらは金海式土器との頸部屈曲の類似性から、無文土器文化の末期に現れる形態として理解されている。弥生土器との共伴による推定時期は、報告者に従えば芦ヶ浦が後期中葉、オテカタが中期後半～後期前半、そして秋根が中期初頭であり、遺跡によってかなり時期差のあることがわかる。

近年韓国では調査が進み、特に南端部地域を中心に、無文土器と弥生土器との共伴が確認されてきている²³⁾。それによると、慶

州の朝陽洞遺跡下層で、牛角形把手や典型

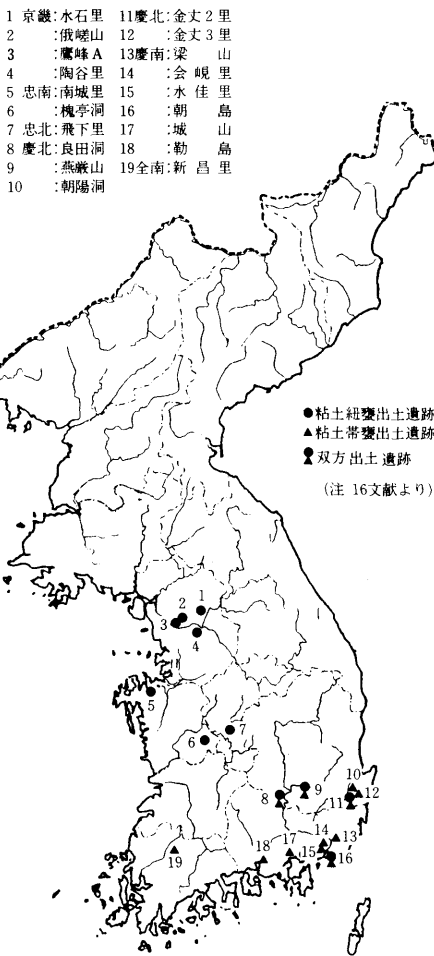


Fig. 113 朝鮮半島における無文土器甕の分布

的な口縁断面三角形の「粘土帯甕」に、城ノ越～須玖Ⅰ式の弥生土器甕が伴出したという。三千浦市の勒島遺跡でも、当六連島遺跡出土のものに酷似する「粘土帯甕」が、城ノ越～須玖Ⅰ式の土器多量とともに表採されており、牛角形把手と「粘土帯甕」の単純遺跡であることから、これに伴うとしてまず間違いないとされる。ただし勒島遺跡では須玖Ⅱ式と思われる高坏片も採集されており、「粘土帯甕」の下限が弥生中期後半以降に下がる可能性のあることが指摘されている。そして釜山市朝島Ⅰ区貝塚Ⅲ層では、把手は組合せ牛角形と牛角形の両方が、甕は「粘土紐」から「粘土帯」への過渡的形態のものが存在し、これらに城ノ越式と思われる甕が伴出することから、「粘土帯甕」の上限が弥生中期初頭に比定されている。

述べてきたとおり、日本と韓国とは「粘土帯甕」に共伴する弥生土器の時期が必ずしも一致していない。より韓国に近い対馬の芦ヶ浦やオテカタでは完全に時期が遅れており、かえって日本本土の秋根遺跡例のほうがほぼ韓国と一致した時期のものとみられるのは、一考を要する問題である。

六連島遺跡の「粘土帯甕」の時期は、以上のことより弥生Ⅱ～Ⅲ期の範疇にはおさまりそうである。韓国本土での共伴例や周辺の綾羅木郷・秋根・長行の各遺跡での出土例を考慮すると、そのなかでもⅡ期の後半（中期前葉）の可能性が高いが、秋根遺跡例を出土した溝には中期後半に降るとと思われる土器も含まれており、さらに後期中葉の壺を伴ったとされる対馬の芦ヶ浦洞穴例や、韓国勒島遺跡の須玖Ⅱ式土器の存在などから、「粘土帯甕」の時期幅を認めるとすると、Ⅲ期に属する可能性も大きくなってくる。

日本では今のところ、完全な口縁断面円形の甕と「く」字状に折れる頸部をもつ口縁断面三角形の甕との共伴例はもとより、同一遺跡からの時期を異にする検出例も報告されていない。これは、この二者の流入時期だけではなく、それを受け入れた地域が異なってい

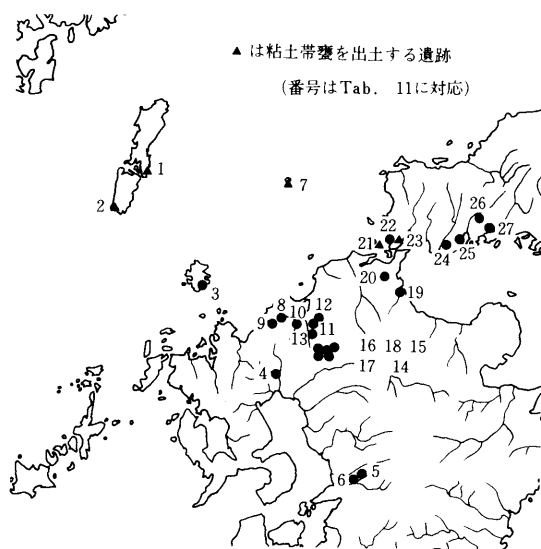


Fig. 114 九州・山口地方における無文土器甕の分布

たということを示す。福岡平野、筑紫平野を中心に、まとまった量の「粘土紐甕」が貯蔵穴などより出土するという事実は、朝鮮半島からの移住集団がこの地で定住的な生活を営んだことを物語るが、異文化が異文化として成り立っていた期間は短く、土生遺跡に典型をみるように、瞬く間に弥生文化に統合・吸収されている。ただし、先進地域を外れると、遅くまでその形態を残す例がみられる。

一方「粘土帯甕」は、資料が少なく即断しがたいが、東寄りの経路をとって日本に到達したように見える。これは、韓国本土で「粘土帯甕」に共伴する弥生土器が遠賀川以西系であることと矛盾する。韓国で中期前半の福岡平野系土器と共伴していながら、当の福岡平野では中期前半のみならずその後もずっとこの「粘土帯甕」を受け入れていないことに留意すべきであろう。これは、無文土器の系譜や時期の差違のみでなく、弥生文化先進地域における朝鮮文化の受容体制の一端を物語っていると思われるからである。

おわりに

六連島遺跡出土の朝鮮系無文土器を、同出土の弥生土器とともに紹介した。良好な一括資料が増加している「粘土紐甕」に比べ、「粘土帯甕」は日本での出土例に乏しい上に共伴土器に時期幅があり、ましてや包含層出土の本資料をもって年代を取りざたすることが無謀であるのは言うまでもない。御叱正を乞う。また、本稿を含め無文土器の研究が甕の口縁部形態の特異性にのみ依存し、甕全体の形状やセット関係にある他の器種に対する関心に希薄である点が、その検討に耐えうる良好な資料の蓄積とともに解決されるよう望みたい。

六連島遺跡の文化期は弥生時代のみに限られない。当館所蔵のものだけでも、弥生土器の他に、かなりの量の縄文土器（後・晩期）、古墳時代の土師器、古墳～歴史時代の須恵器、龍泉窯系の青磁などがあり、様々な時代を通じて断続的に営まれた複合遺跡であることが知れる。加えて、製塩に伴う容器とされ当遺跡名を冠する六連式土器や、棒状土錘、人骨、獣・魚骨など、注目すべき遺物が保管されており、これらは今後、館蔵資料目録という形で紹介してゆくつもりである。

なお末尾ではあるが、整理・執筆にあたって資料館長近藤喬一先生をはじめ、河村吉行、森田孝一、古賀信幸、吉田寛、菅波正人、久野孝一、柏本秋生、南時夫の各氏に、懇切な助言・協力を賜ったことを明記し、謝辞に代えたい。

Tab. 11 九州・山口地方の無文土器出土遺跡地名表 (参考資料)

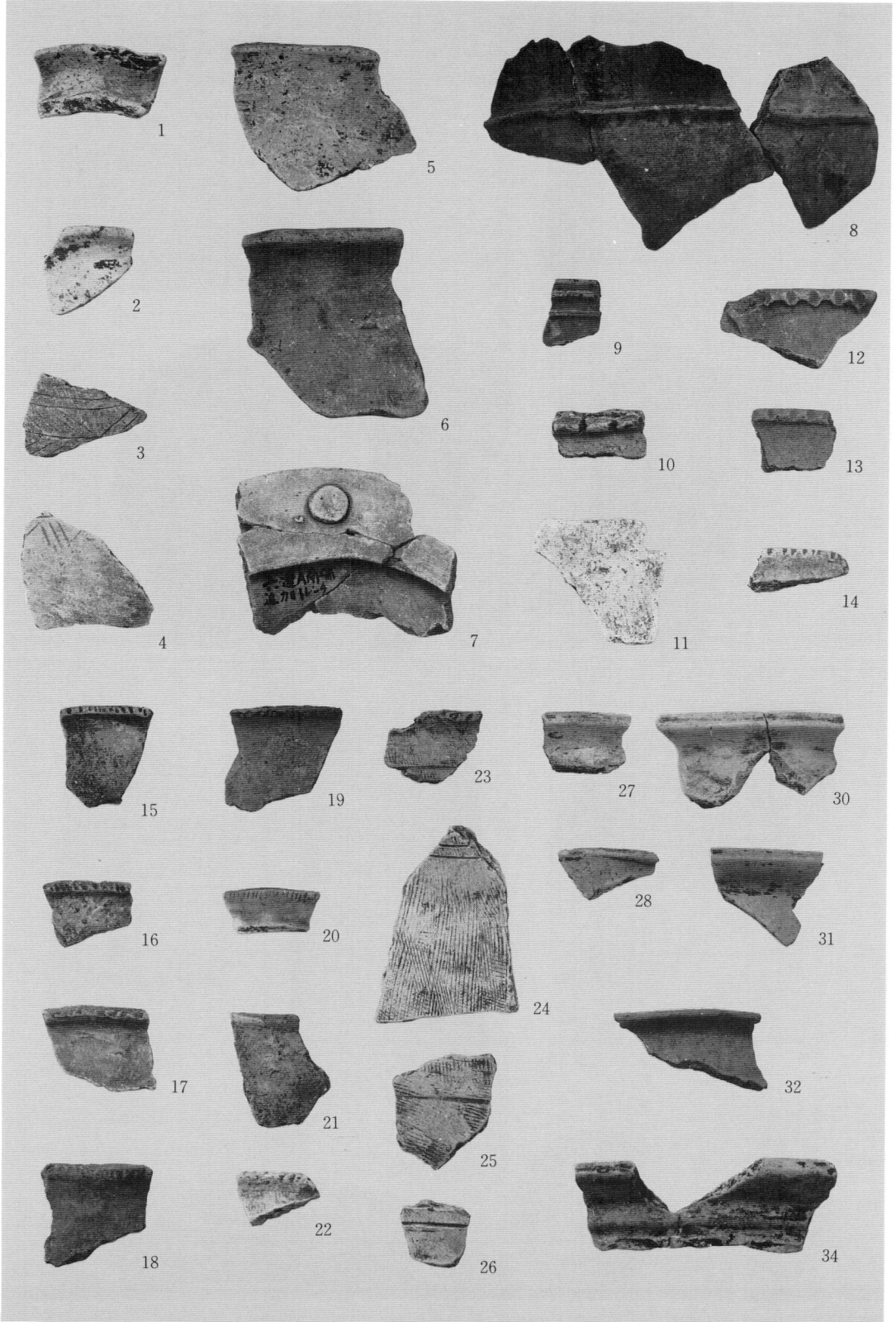
No	遺跡名	所在地	無文土器				文献
			粘土縄文	粘土帯文	変形形態	他器種	
1	芦ヶ浦第1洞穴	長崎県下県郡美津島町 鴨居瀬字寺越	—	1	1	—	・注13) 文献
2	オテカタ	長崎県下県郡厳原町 豆酸	—	○	—	—	・注14) 文献
3	原の辻	長崎県老岐郡芦辺町 西触	2	—	1	—	・注10) 文献 ・長崎県教育委員会『原の辻遺跡』(長崎県文化財調査報告書第37集, 1978年)
4	土生	佐賀県小城郡三日月町 大字久米字土生	—	—	○	壺口縁部、組合牛角形 把手、蓋、高杯、黒色 磨研鉢、器台、壺	・注22) 文献
5	江津湖	熊本県熊本市健軍町 苗代津	2	—	—	—	・注10) 文献
6	御幸木部町	熊本県熊本市御幸木部 町加勢川河床	3	—	—	—	・注10) 文献
7	沖ノ島	福岡県宗像郡 大島村沖ノ島	—	2	—	—	・注12) 文献
8	三雲番上	福岡県糸島郡前原町 三雲	—	—	—	鉢1	・福岡県教育委員会『三雲遺跡Ⅲ』(福岡県文化財調査報告書第63集, 1982年)
9	石崎曲り田	福岡県糸島郡二丈町 大字石崎字曲り田	1	—	—	壺牛角形把手1	・福岡県教育委員会『石崎曲り田遺跡—Ⅰ—』(今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第8集, 1983年)
10	有田	福岡県福岡市 早良区有田	—	—	1	—	・注10) 文献
11	板村	福岡県福岡市 博多区板村	2	—	1	—	・福岡市教育委員会『板村—市営住宅建設にともなう発掘調査報告書—』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集, 1976年)
12	諸岡	福岡県福岡市 博多区諸岡	47	—	—	壺口縁部3、組 合牛角形把手1	・福岡市教育委員会『諸岡遺跡』(『板村周辺遺跡調査報告書(2)』, 福岡市埋蔵文化財調査報告書第31集, 1975年)
13	門田	福岡県春日市大字 上白水字門田・辻田	—	—	2	—	・福岡県教育委員会『門田遺跡・辻田地区の調査』(『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第7集, 1978年)
14	横隈山	福岡県小郡市三沢	2	—	—	—	・注10) 文献
15	横隈鍋倉	福岡県小郡市横隈	36	—	5	壺組合牛角形把 手1(底部12)	・注16) 文献
16	三沢蓬ヶ浦	福岡県小郡市三沢	—	—	1	—	・福岡県教育委員会『三沢蓬ヶ浦遺跡』(福岡県文化財調査報告書第66集, 1984年)
17	北牟田	福岡県小郡市三沢	—	—	1	—	・福岡県教育委員会『北牟田遺跡の生活遺構と遺物』(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—XXXI—』上巻, 1979年)
18	みくにの東	福岡県小郡市横隈	3	—	—	壺組合牛角形把 手2	・注10) 文献
19	長井	福岡県行橋市長井	—	—	1	—	・行橋市教育委員会『下穂田遺跡』(行橋市文化財調査報告書第17集, 1985年)
20	長行	福岡県北九州市 小倉南区長行	—	—	—	鉢1	・注21) 文献
21	六連島	山口県下関市大字 六連島字音次郎	—	2	—	—	・注2) 文献 ・本書
22	綾羅木郷	山口県下関市綾羅木	1	—	—	鉢5	・注4) 文献
23	秋根	山口県下関市秋根	—	1	—	—	・注5) 文献
24	沖ノ山	山口県宇部市大字 沖ノ山字松浜	—	—	1	—	・注6) 文献
25	引野	山口県吉敷郡阿知須町 引野	—	—	2	—	・注7) 文献
26	西	山口県山口市大字黒川 字平木	—	—	1	—	・注8) 文献
27	大崎	山口県防府市大字大崎 字東谷・前長尾	—	—	1	—	・注9) 文献

下関市六連島遺跡出土の朝鮮系無文土器

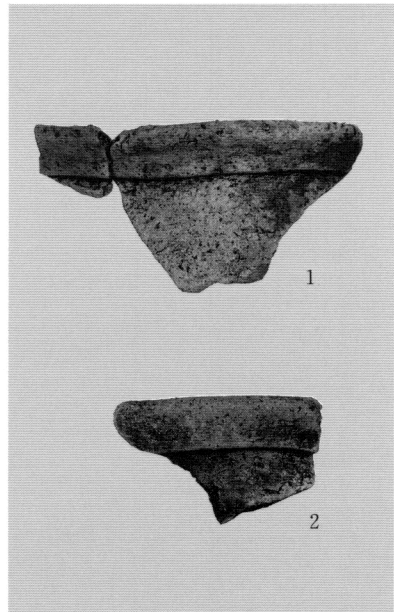
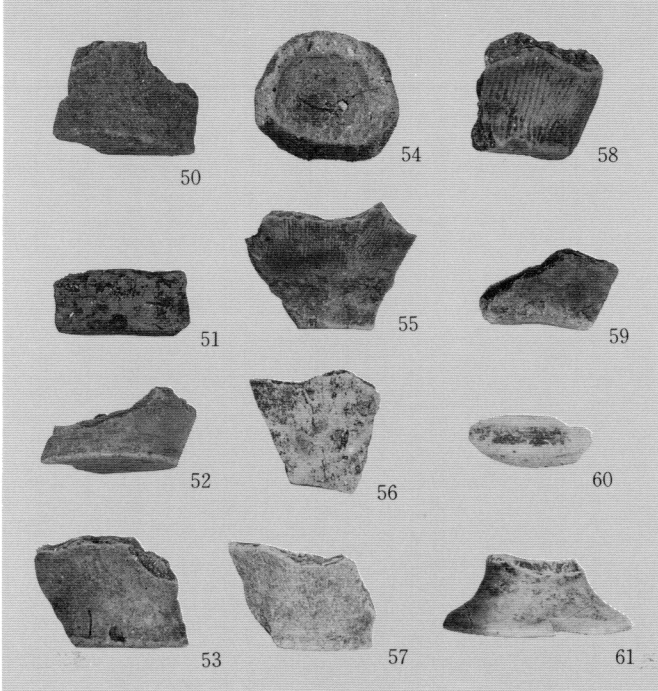
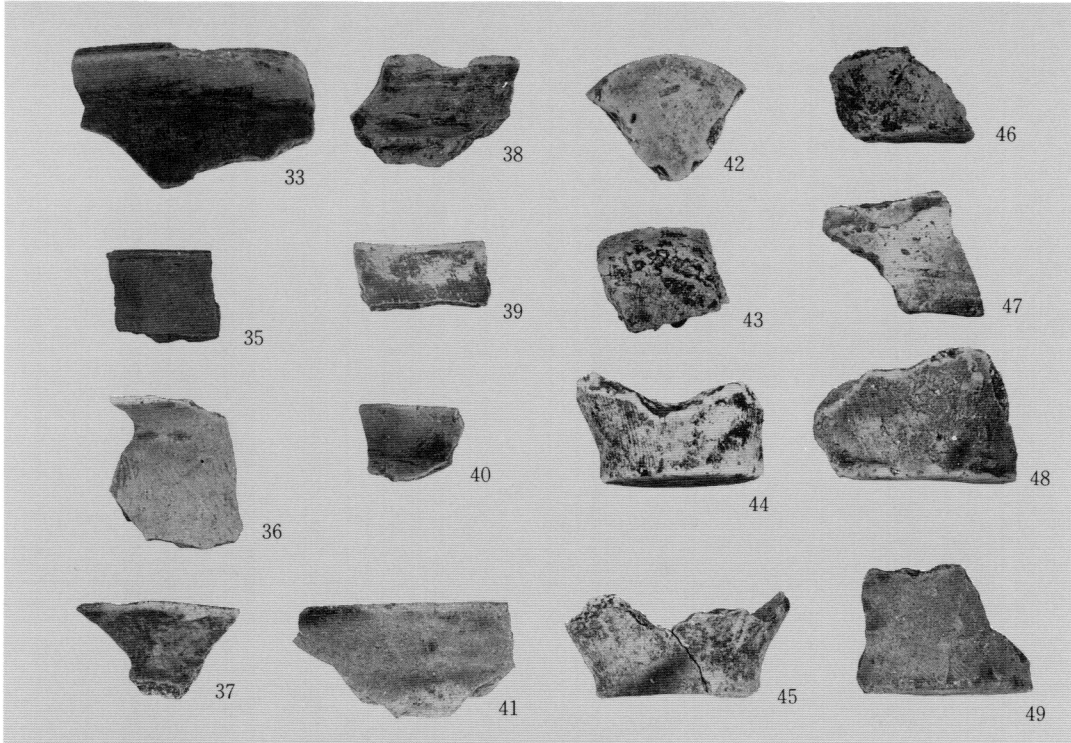
[注]

- 1) 田代弘「畿内周辺部における「朝鮮系無文土器」の新例」(『考古学と移住・移動』、同志社大学考古学シリーズⅡ、1985年)。
- 2) 小野忠熙「六連島遺跡」(『山口県文化財概要』第4集、山口県教育委員会、1961年)。
49ページ第47図の2が今回紹介する資料にあたると思われる。
- 3) 吉村次郎「原始・古代」(『下関市史』原始-中世、下関市役所、1965年)。
小野忠熙「山口県の考古学」(1985年)。
- 4) 下関市教育委員会「綾羅木郷遺跡発掘調査報告第Ⅰ集」(1981年)。
- 5) 下関市教育委員会「下関市秋根遺跡」(1977年)。
- 6) 小田富士雄「山口県沖ノ山発見の漢代銅銭内蔵土器」(『古文化談叢』第9集、九州古文化研究会、1983年)。
- 7) 阿知須町教育委員会「貝塚を伴う高地性集落引野遺跡」(『引野遺跡・丸塚古墳』、吉敷郡阿知須町引野遺跡・丸塚古墳第二次発掘調査報告、1978年)。
阿知須町教育委員会「引野遺跡」(山口県吉敷郡阿知須町引野遺跡第三次発掘調査報告、1981年)。
- 8) 山口市教育委員会「西遺跡」(山口市埋蔵文化財調査報告第21集、1986年)。
- 9) 山口県教育委員会・山陽都市開発株式会社「大崎遺跡」(『奥正権寺遺跡Ⅱ・大崎岡古墳群・大崎遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第82集、1985年)。
- 10) 後藤直「朝鮮系無文土器」(『三上次男博士頌寿記念東洋史・考古学論集』、1979年)。
以下、「粘土帯甕」という場合は、口縁断面三角形でかつ頸部が「く」字状に屈曲するものをさす。
- 11) 前掲注5)と同じ。
- 12) 宗像大社復興期成会「社務所前遺跡」(『宗像沖ノ島』、1979年)。
- 13) 長崎県教育委員会「芦ヶ浦地区の調査」(『対馬-浅茅湾とその周辺の考古学調査-』、長崎県文化財調査報告書第17集、1974年)。
- 14) 下條信行「オテカタ遺跡」(『日本考古学年報』28、1975年度版、日本考古学協会、1977年)。
- 15) 前掲注10)と同じ。
- 16) 小郡市教育委員会「横隈鍋倉遺跡」(みくに野第二土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告-2-、小郡市文化財調査報告書第26集、1985年)。
- 17) 申敬澈「熊川文化期紀元前上限説の再考」(後藤直訳、『古文化談叢』第8集、九州古文化研究会、1981年)。
- 18) 前掲注2)と同じ。
- 19) 田崎博之「須玖式土器の再検討」(『史淵』第122輯、九州大学文学部、1985年)。
- 20) 前掲注2)と同じ。
直良信夫氏の魚骨鑑定により春から秋にかけて捕獲される魚のみが確認されたことから、小野氏がこのような見解に至っている。
- 21) 前掲注4)と同じ。
(勸北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室「長行遺跡」(北九州市埋蔵文化財調査報告書第20集、1983年)。
- 22) 佐賀県教育委員会「土生遺跡群」(『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財確認調査報告書』、佐賀県文化財調査報告書第37集、1977年)。
- 23) 前掲注17)と同じ。
以下、韓国の遺跡についての記述は当文献による。

下関市六連島遺跡出土の朝鮮系無文土器(1)



六連島遺跡出土の弥生土器(1)



(1) 六連島遺跡出土の弥生土器(2)

(2) 六連島遺跡出土の朝鮮系無文土器